

『日本のアイヌ』の映像について

講演者：森岡健治（平取町立二風谷アイヌ文化博物館長）

イランカラブテ。アイヌ語で「こんにちは」を「イランカラブテ」と言います。どうぞ覚えて帰ってください。

私からは、この映像がどこで撮影されたのか、という依頼を先月受けまして、そのことについて説明をさせていただきます。

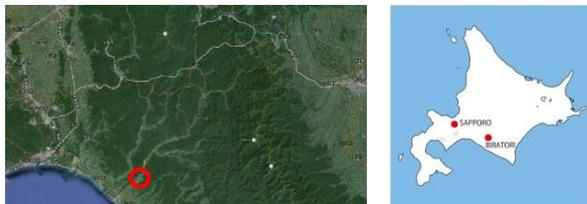
実はこの映像は、二年前に一度見たことがあります。思い出すのにちょっと時間がかかったのですが、平取町で「日本映像民俗学の会」の大会が開催されまして、その上映会で、株式会社東京シネマ新社の岡田一男さんが紹介されました。その時には、平取町内を流れている沙流川付近のどこかで撮影したのだろう、ということぐらいしか情報としてはまだ分かっていませんでした。そこにたまたまこのお話がありまして、あらためて場所を特定する作業を行ってみました。

北海道の平取町がどこか分からない方もいらっしゃるかもしれませんが、紹介させていただきます。北海道の太平洋側、札幌から100 kmぐらい離れたところに所在します。海岸線からは、15 kmほど内陸に入ったところに、平取町、当時の平取コタンがあります（図1）。明治29（1896）年の地図（図2）では、平取コタンはおそらく地図中央の白い部分の左上あたりで、そのすぐ北側には義経神社（赤い丸）があり、ちょうど目印になります。現在の地図（図3）でもそうですけれど、義経神社の目の前、道路の線形は何も変わっておりません。その神社の目の前の道路を挟んだ赤い丸のあたりに、当時の平取コタンの長、「エカシ」と言いますが、平村ペンリウクという人の家がありました。この映像は、その家の前で沙流川（東向き）に向かって撮影したものではないかと思えます。

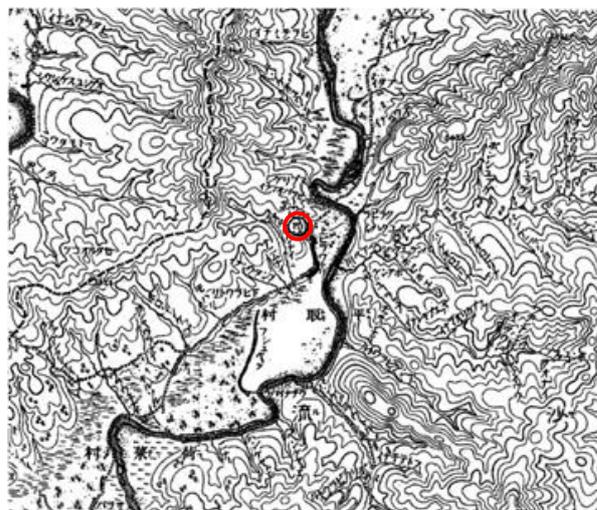
平村ペンリウクの「平村」姓ですが、明治以前は、蝦夷地は日本ではなく、アイヌ民族も名字がありませんので、後につけられたということになります。そこで、平取コタンは明治から「平取村」と呼ばれるので、平取

村に住んでいた人は誰かれ関係なく、「平村」という名字をつけられます。そのなかで、平村ペンリウクさんは、アイヌコタンの代表みたいな方です。

ちょっとだけ撮影前の明治時代のお話をさ



【図1】平取町の位置



【図2】明治29年 仮製五万分の一図



【図3】現在の平取町本町と平村ペンリウク宅跡

せていただきますが、今言ったように「蝦夷地」から「北海道」という名称に変わる訳ですが、明治4（1871）年になりますと戸籍法制定でアイヌの人たちは日本国民に組み込まれます。今言ったように、彼らは名字を持って

いないものですから、それぞれの地域毎に名字をつけられます。平取コタンの人は「平村」、二風谷コタンの人は「二谷」、今私が勤務している二風谷は元々、ピパウシコタンというところで、ピパウシというのは“貝のある沢”という意味ですので、「貝澤」という名前がつけられた。さらに女性は刺青を口の周りとか腕にしていたのですが、禁止される。それから今は女性が付けているニンカリ（耳飾り）も、元来は男性がしていましたが禁止される。もちろんアイヌ語も禁止される。「みなさん日本語を覚えなさい」というような、日本国民に組み込まれていく政治的な流れが明治4年からいよいよ強くなっていきます。

ただ、平取というところは不思議と、明治の初め頃から、ヨーロッパ、特にイギリスから人が訪れています。代表的なのは、明治11（1878）年にイザベラ・バードという女性旅行家が横浜から東北地方、北海道の函館を経て通訳とともに、先ほど紹介した平取の義経神社まで来ており、平村ペンリウクの家に滞在したという記録が残っております。また翌年の明治12（1879）年には、聖公会のイギリス人ジョン・バチェラーが、平村ペンリウクの家で3か月滞在しながら、アイヌ語と日本語と英語の辞書（蝦和英三対辞書）をつくっています。この方の影響力は平取ではかなりありまして、現在もバチェラーの保育所がある、そういうところなんです。

この写真（図4）に義経神社の鳥居が写っておりますが、この写真自体は明治26（1893）年から大正8（1919）年の間に撮影されたものです。鳥居の右上に社殿があります。鳥居の前には「義経神社」と書かれた標柱が建っています。標柱の背後の建物は平村ペンリウクの家ではありませんが、

明治5（1872）年に沙流川の河口に佐瑠太（さるふと）学校ができ、さらに明治13（1880）年に佐瑠太学校平取分校ができるときに、平村ペンリウクがかなり尽力したという記録が残っていて、その学校と思われます。

明治34（1901）年になるとペンシルバニア



【図4】1893(明治26)年以降の義経神社 北海道平取町所蔵

大学のハイラム・ヒラーという人が平取の写真を撮っています（図5）。この写真を見ますと、画面左側に沙流川が写っています。左端が上流です。画面右端には義経神社の鳥居（赤い丸）が写ってしまっていて、先ほど紹介した道路が左手の家並みのところにありまして、おそらくペンリウクの家は、ここには写っていませんが、この写真の中央のあたりです。鳥居側の方から沙流川の方に向かって動画は撮影



【図5】 Photograph by Hiram M. Hiller. Courtesy of the Penn Museum

されていると思います。この写真を見ますと、

手前は古くからあった平取コタンで茅葺の家、それから下流側の方にはどんどん和人（日本人）が入って来て、新しい町が作られていく、というのが分かります。

次の写真は明治36（1903）年に、ブロンスワフ・ピウスツキという、ポーランドの国家元首ユゼフ・ピウスツキのお兄さんにあたる人が撮影した写真です（図6）。彼はロシアで



【図6】 Bronislaw Pilsudski, The Collected Works of Bronislaw Pilsudski Volume 3: Materials for the Study of the Aino Language and Folklore 2, Alfred F. Majewicz, ed., (Berlin: Mouten de Gruyter, 2004.).



【図7】 Allen Memorial Art Museum, Oberlin College, Ohio. Gift of Christopher Thomas (OC 1975)

学生時代を過ごしていた際にサハリンに流刑されて、日露戦争の直前にアイヌ研究のため平取に来る機会があって写真を撮っています。この写真にも、義経神社の標柱が写っています。周りに家がありますが、恐らく道路を隔てた平村ペンリウクの家の前から沙流川を右手に（川は写っていませんが）写しています。たぶん、この場所は中心街とでも言いますか、よく撮られる場所を下流側から上流方向に向かって撮っていることが分かります。

アーノルド・ゲンテというドイツ系アメリカ人だと思いますが、明治42（1909）年に平取コタンの写真撮影をしております（図7）、この写真にも陰になっていますが中央に義経

神社の標柱がちょっとだけ写っています（赤丸）。ピウスツキの写真と背景がよく似ていますので、同じ場所で撮られたと思います。標柱を左に曲がると、鳥居が見える場所、そこで当時のアイヌの人の踊りを写真撮影しているわけですが、本日見ていただいた動画とほとんど同じ衣装、踊り方です。

今日の映画の一コマです（図8）。これがど



【図8】女性の衣装と舞踊 Courtesy of BFI National Archive

こかという前に、まず一つの特徴として、女性が着ている着物、チカラカラペと言いますが、刺繍された裕（あわせ）の着物です。頭に巻いているのはヘコカリブという無地の鉢巻きです。みなさんが『ゴールデンカムイ』とかでよく見る鉢巻きは刺繍が施されていますが、あれは元来、女性が刺繍をして男性にプレゼントするもので、マタンブシといいます。元々は男性がしていたものです。今でも平取では、女性はヘコカリブという無地のものをしています。明治になってアイヌの風俗が禁止されて一度文化が途絶える中で、明治30年代ぐらいになった時に、またちょっと復興するなかで流行り出します。『ゴールデンカムイ』の時代背景では女性たちが刺繍をしたものをしてしていますが、それ以前とは少し違っているということです。

この男性が着ている着物は、カパラミブといいまして、白い切り抜きの模様の付いた木綿の服で、平取では有名なデザインです（図9）。これも撮影地域が判明したひとつの決め手になっています。頭にかぶっているのはサパンペといいます。サパンペの先端につけているのが熊をかたどった彫り物ですが、沙流川流域のアイヌの人たちは熊をかたどったも

のが多いようです。熊の彫刻は、すごく精巧に彫ることができるのですが、そうすると魂が乗り移るといふことで、あえてそっくりに作らないということです。そのサパンペをかぶって、トウキパスイ（捧酒箸）で神様にお酒を一滴ずつ垂らして、それを祈りの言葉とともに神の国にたくさん届けるといふ、カムイノミ（神への祈り）を撮影したのだろーと思ひます。

映画の中では入れ墨の話もありました（図10）。ただ、明治4年になりますと、入れ墨自体は日本政府から禁止されます。以前から入れ墨を彫っている方は消しようがないので、



【図9】 男性の衣装と儀礼 Courtesy of BFI National Archive



【図10】 入れ墨 Courtesy of BFI National Archive

大正・昭和の時代になっても入れ墨をつけたままのおばあちゃんはいましたが、この映画に出てくる何人かの女性は、それほど年配にも見えないので、ひょっとしたら、アイヌの踊り、あるいは儀式を紹介するためにあえてペインティングしている、入れ墨ではない可能性も考えられます。なかなか断定はできませんが、そんなことを感じました。

問題は場所を特定することです。これ（図11）は映画が撮影される以前の明治28（1895）



【図11】1895(明治28)年 平村ペンリウク宅前 北海道大学図書館所蔵



【図12】没後のペンリウク宅前のバチェラー(フレデリック・スター撮影) Frederic Starr, The Ainu group at the Saint Louis Exposition, (Chicago: Open Court Pub. Co., 1904),30. <https://archive.org/details/ainugroupatsaint00staruoft>

年に、ペンリウク宅前で撮影されたものでして、背景もはっきり写されています。私は、この家の角の部分に映画に写っているんだろうと感じました。その後、ペンリウクは明治36年に亡くなっておりまして、翌年の37（1904）年にジョン・バチェラーがペンリウクの家を訪れています。配布した岡田一男さんの資料にも書かれていますが、この写真は、フレデリック・スターあるいはその助手が撮ったんじゃないかという可能性があるわけですが、まさにこの明治37年にバチェラーを撮影したものです（図12）。このときの家は、ペンリウクは既に亡くなっており、屋根の茅も相当古くなって段差がなくなっていることが分かります。

この明治37年はセントルイス万国博覧会がありまして、バチェラーの信者であるアイヌの人たちがセントルイスまで行くという年でもあります。それから、家の角はペンリウクの家にあそび場ですが、映画の撮影時期は大正の初期に入っていますので、茅葺を修繕して少し新しくなっているようにも思われます（図13）。映画に写っていた石（入口の右側）も、もしかしたらバチェラーの写真に写っているかもしれません。

これが先ほど映したバチェラーの写真（左下）で、バチェラーを撮ったときには古い屋根でした。現在、ペンリウクの家跡地からその背後を撮ってみて（カラー写真）、これらを合成

してみました（図14）。図13に写っている背景はこの赤い丸の辺り、見えにくいですが沙流川もこの辺（山の手前）を左から右に流れている、という場所ではほぼ間違いないと思います。

最後に、踊りが三種類ぐらいあったと思いますが、そのなかでもアンナホーレという、鳥の舞を紹介します。

（記録ビデオ上映）

映画に出ている三種類の踊りのうちのひとつ、一番最初に出てきたのは、鳥の舞、アンナホーレだと思っています。これで私の話を終わらせていただきます。イヤイライケレ。どうもありがとうございます。



【図13】撮影場所と背景(A) Courtesy of BFI National Archive



平村ペンリウク宅前 北海道大学図書館所蔵



【図14】撮影場所と背景(B) 写真左:Frederic Starr, The Ainu group at the Saint Louis Exposition, (Chicago: Open Court Pub. Co., 1904),30. <https://archive.org/details/ainugroupatsaint00staruoft>